

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 杉田 静紀

論 文 題 目

Clinical significance of lymphatic invasion in the esophageal region
in patients with adenocarcinoma of the esophagogastric junction

(食道胃接合部癌における食道側リンパ管侵襲の臨床病理学的重要性の
検討)

論文審査担当者


名古屋大学教授

主 査 委員

小寺泰弘 


名古屋大学教授

委員

藤成光弘 

名古屋大学教授

委員

安藤雄一 

名古屋大学教授

指導教授

江畑智希 

論文審査の結果の要旨

今回、食道胃接合部癌のリンパ管侵襲を食道胃接合部を境に食道側の eLI と胃側の gLI に分け、それぞれが縦隔リンパ節転移や生存期間に与える影響を検討した。多変量解析の結果、eLI は縦隔リンパ節転移のリスク因子であり、予後不良因子の一つと考えられた。一方、gLI はどの検討でも抽出されなかった。Siewert type II 患者に限定した副次解析においても、eLI は予後不良因子の一つと考えられたが、gLI は抽出されなかった。この結果、食道胃接合部癌の病理組織学的検査において、eLI と gLI を分けて検討することは意義があると考えられた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 本検討では「全ての縦隔リンパ節転移」のリスク因子を検討したが、経裂孔的な術式でも下縦隔リンパ節は郭清される。術式が劇的に変わるファクターとしては上中縦隔のリンパ節転移リスク因子が重要と思われる。今後症例を蓄積し、上中縦隔に絞ったリンパ節転移のリスク因子解析が望まれる。
2. 今回は単純に eLI、gLI の有無によってグループを分けて検討をしており、Ly1 ~ Ly3 といったリンパ管侵襲の程度による検討や、腫瘍組織外の食道口側断端付近のリンパ管侵襲有無による検討は行っていない。さらに、バレット食道癌と通常の食道胃接合部癌のリンパ管侵襲がそれぞれ生存やリンパ節転移に及ぼす影響の違いや、eLI、gLI のみ陽性の患者、両方とも陽性の患者に分けての検討も行っていない。本検討でこれらを検討しようとする、各グループの症例数が少なくイベントも少ないために統計学的検討が困難であった。しかし、本検討で得た eLI が縦隔リンパ節転移と予後に相関するという結果は、「食道胃接合部癌ではリンパ管侵襲の場所も重要である」という今までの概念とは異なるものであった。今後、さらに症例数を蓄積してこれらの詳細な検討を行う必要がある。
3. 今回の検討で gLI が予後に影響しなかった理由は不明である。しかしながら、一般的に食道胃接合部癌において縦隔リンパ節転移を認める患者の方が予後不良との報告が散見される。今回の検討では eLI が縦隔リンパ節転移のリスク因子となった一方で gLI はリスク因子とならなかったことから、gLI より eLI がより予後に相関したものと考えられる。
4. 本研究結果より eLI 陽性の患者は縦隔リンパ節転移や不良な予後との相関が示唆された。特に Siewert type II の接合部癌患者においては上中縦隔リンパ節の郭清が行われていない場合もあり、それらの患者に対しては、通常よりも密な外来フォローを行う、多剤の術後補助化学療法を行う、縦隔リンパ節への放射線治療などを検討することも選択肢の一つと考える。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	杉田静紀
試験担当者	主査	小寺泰弘	副査 ₁	藤城光弘
	副査 ₂	安藤雄一	指導教授	江畑智希
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 上中縦隔リンパ節転移のリスク因子について 2. リンパ管侵襲の量的、質的な検討や部位による違いについて 3. gLIが予後に影響しなかった理由について 4. 今回の研究結果を臨床へ還元する方法について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、腫瘍外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				